

建材 マンズリー

No.620

6

JUNE
2017

特集

温故知新・ 昔の暮らしにパッシブを学ぶ

ここでちょっと一息 Coffee Break

経営とデザインによる統合が進む、 インテリア産業の動向

@ミラノ・サローネ2017

注目企業を訪ねる

株式会社きものブレイン



温故知新・昔の暮らしにパッシブを学ぶ

日本の木造住宅は、地域の気候・風土・文化に根ざした住まいづくりの好例とされる。高温多湿な地域が多い我が国では、暑さを遮る厚い屋根や深い軒、開放的な開口部を持った住まいづくりが行われていた。太陽の光や熱、自然の風を取り入れたり、遮断したりしてしつらいを変え、四季の移ろいに対応し自然を愛でる感覚を養い、自然を大いに享受してきた。一方、昨今の住まいは寒暖の差を感じにくい高気密・高断熱住宅が主流となり、日本の古き良き時代の住まいは、影を潜めつつあるように見える。伝統的な住宅からどのような教訓が得られるのか。国が気候風土適応型住宅への取組み支援を進める中、今号では、伝統的な日本の住まいや暮らしの智恵や工夫に焦点をあてる。

「閉鎖型」と「選択型」
建物は気候条件により

室内の気候制御という観点からみると、民家はだまかに2つのパターンに分けることができます。ひとつは、寒冷地や砂漠などで見られるもので、厳しい気候から生命を守るため、内外の遮断をもつばらとする「閉鎖型」、もうひとつは比較的温暖な地域で見られるもので、外界の変化に合わせて風や太陽の熱や光を取り入れる、「選択型」。この分類に従えば、日本の住宅は、「選択型」の典型といえます。

吉田兼好が『徒然草』で「家の作りやうは、夏をむねとすべし」と書いています。冬の寒さは何とかしのげるが夏の暑さは耐えられないからとも言っていますから、相対的な結論であったのかもしれない。高温多湿な夏の暑さに対処するための周回な配慮がされてきました。日射を遮蔽する大きな屋根や庇、通風や排熱を促す開放的な室内の空間構成など、さまざまなスケールで巧妙な仕組みが考えられています。隙間だらけの家は建物の寿命を長くするためでもありました。



日本の木造住宅は柱と梁からなる構造ですから、開放的な空間をつくれる利点があります。必要なら柱と柱の間に建具を入れ、開閉して空間を仕切ることが出来ます。建具には、板戸、ふすま、紙障子、すだれ戸などがあり、季節の変わり目には入れ替える「衣替え」の習慣もありました。また、用途に応じて一時的な「しつらえ」を置くというシステムもとても柔軟な発想に基づくものです。季節ごとの模様替えは実用的な目的のほかに、生活にメリハリを与えて、自然を楽しむための装置でもあったでしょう。

気候風土との調和を目指した昭和初期の実験住宅

1920年代、ヨーロッパの視察を終え、京都大学で教鞭をとった建築家の藤井厚二は、「その国の建築精神を代表するものは住宅建築である。感覚や風習、習慣、趣味・土地

や気候や風土を反映しなければいけない。家族の快適さを第一に目指すこと」と考え、科学的なアプローチの重要さを説き、『日本の住宅』を著しました。また、自ら5つの実験住宅を設計しました。五番目の家が京都・山崎の「聴竹居」(1928年)です。竣工した後は室温の実測もしています。

数寄屋造りの傑作とも評される瀟洒な建物ですが、科学的な考察のもとに、様々な新しい試みをしています。大きなガラスで覆われた南向きの縁側は、温室のような空間で、冬の日射を室内に取り込み、夏は、室内全体の空気の流れを考えて、地窓や屋根裏排気口を配置しています。床下空間から風を取り入れ、地中で冷やしてから室内に入れるという工夫もしています。しかし、断熱や気密が十分ではなく、まだ夏と冬



写真提供：竹中工務店 撮影：古川泰造

聴竹居：日本の気候・風土との調和を目指した昭和初期の木造住宅

の快適さを両立することは難しかったようです。

パッシブの意義を次世代に受け継ぐ

1973年からのエネルギー危機の後、パッシブデザインの研究が盛んにおこなわれるようになりました。最初は暖房が中心でしたが、やがて夏の冷却法も開発の対象になりました。この時期はコンピュータによる熱の解析が実用化した時期で、それがパッシブの研究を推進したという背景もあります。断熱化、気密化の技術も進み、ようやく、夏も冬も旨とする住宅の実現が、リアリティを持ってきたのです。

私も33年前に実験住宅(つくばの家)を作りました。冬は日射を取り入れ、その熱を蓄えて、翌朝まで暖房効果を得、夏は逆に、夜間の冷気を積極的に取り入れて、蓄え、翌日の冷却効果を得るというシステムです。日射の遮蔽には、冬場は葉を落とすツタ植物を利用しました。暖冷房を全く使わないわけではありませんが、パッシブデザインのポイントは暖房にも冷房にも依存しない「中間期」をどれだけ長くできるか作れ

るかが、設計において非常に大切になってきます。

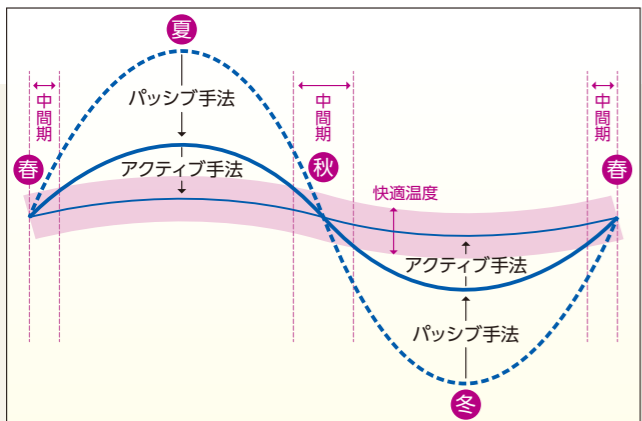
最近断熱材やガラスなどの建材の性能がどんどん進化し、パッシブの可能性はますます高まっています。一方で、人工知能やIoTを使って、高効率の暖冷房機器をコントロールし、外界と遮断された住まいを常に快適に維持しておくことも可能になりました。

自然と応答するパッシブ型であれば、宇宙船のようなアクティブ型であれば、高い省エネルギー性能を持ち、地球環境負荷も小さいとなると、その違いは何かと問われます。快適さの質の違い、自然とのかかわり方、ライフスタイルやコミュニティ意識の違いなどいろいろ考えられます。

全自動の均質な快適さも魅力的ですが、風を入れたい時は自ら窓を開け、寒くなったら窓を閉める行為も大切です。「ずいぶん暑くなったな」とか「少し寒くなってきたかな」など、季節の変化を肌で感じて楽しむ

ことができるのは人間の営みといえますし、贅沢な快適さといえるかもしれません。このような時期に、昔の暮らしを振り返って、近未来の住まいのあり方を考えてみるのも意義のあることです。まずは昔のように、四季の変化に合わせた「住まいの衣替え」などから始めて自然の変化を楽しんでみるのはいかがでしょうか。

図1. パッシブデザインの考え方



出所：小玉祐一郎氏作成の資料

実験住宅(つくばの家)の集熱窓(夏と冬)



神戸芸術工科大学名誉教授
株式会社エステック計画研究所
取締役所長

小玉 祐一郎氏

地域の気候風土に 合わせたパッシブデザイン



株式会社アルセッド建築研究所
代表取締役副所長

大倉 靖彦氏



株式会社アルセッド建築研究所
統括

山口 克己氏

「先人の知恵を再確認し、長年培ってきた住まいの所作を整理する」という委員会が、国土交通省の主導で設置された。地域の特性を生かした住宅づくりに数多く携わり、この委員会事務局と冊子の編集に携ったアルセッド建築研究所に、地域により異なるパッシブデザインの工夫を聞いた。

伝統的な木造住宅は、軸組工法を基本とし、日本の気候・風土・文化に根ざした技術・仕様がふんだんに盛り込まれています。2012年に国土交通省は「日本の住まいの知恵に関する検討調査委員会」を設置し、伝統的な木造住宅に用いられる技術・手法などの調査・検討を行いました。そして2014年に現代の住宅づくりに参考となる情報を『今に生きる日本の住まいの知恵』としてまとめ、公開しました。

「準寒冷地」

縁側を断熱ゾーンとして 利用し冬の寒さを緩和する

東北・北陸の準寒冷地では、太陽熱をどう取り入れて逃がさないかが一番大切となります。昔の住宅は断熱性では劣りますが、断熱材の代わりになるものがありました。それが

対象から外しています。

「温暖地」

都市部では高窓から風を確保し、 太陽熱温水器の使用を推奨

温暖地は、関東から九州・四国の北側までの地域です。ここでは敷地の狭い都市部が特に問題になります。住宅が密集しているので、太陽光や日射熱の利用はあまり期待できません。快適に暮らすために風をどう取り入れるかも難問です。ただ屋根周辺には風は流れているので、それを利用するという手があります。

「高窓」(4)や「頂側窓」から風を取り入れ、あるいは排出します。高窓は天窓と違い、日射を遮蔽し雨風

「縁側」(1)です。南面の縁側には、外側にガラス戸と雨戸がはめられ、縁側と和室の間は通常障子などの建具で仕切られています。冬場の日中はガラス戸から日射を取り込み、室内の建具を開け放ち太陽熱を和室に取り入れます。日が陰り雨戸を立て、室内側の建具を閉めると、縁側の空気層が熱の出入りを制御する断熱ゾーンとなり、戸外の厳しい寒さを緩和してくれます。熱的な緩衝空間として縁側が機能するのです。



① 縁側

同様な機能は、住宅の部屋単位でもあります。縁側の代わりに人が集う部屋の「周りの部屋」が、断熱空間の役目を果たすのです。普段使わない座敷や2階部分を断熱ゾーンとして使う発想は、面白いと思います。また、南面の大きな「掃き出し窓」と窓際の「土間」を組み合わせれば、太陽熱を効果的に取り入れ、土間床のコンクリート、タイルなどで蓄熱



② 掃き出し窓と土間

が入り込まないので都合が良いのです。さらに「地窓」(5)を設け、温度差換気と通風による吸い出しで、住宅内に風を流します。このように窓の高低差を利用し、夜間だけ窓を開放しておく、夏場の寝苦しさも解消されます。

「吹き抜け」(4)と1・2階に大きな窓を設ける、「引き戸」や「引き違い戸」で各部屋を開放するなど、通風や空気循環を促すのもよいでしょう。いつそのこと、都市部の住宅ではドアで閉め切られた部屋を作らず、「間仕切りなしの空間」という発想も良いのではないのでしょうか。風通しが良く、採光も十分望めます。断熱性が良くなった現在、こうした家づくりも都市部では有効だと

思います。可能であれば「中庭」(6)や「坪庭」などを設けることもお勧めです。南側の乾いた庭と囲われて湿った庭の組み合わせにより、南側で上昇気流が起るので湿った庭から涼しい風が流れ、とても気持ちがいいものです。

都市部だからといって、自然光を採り入れるのを諦めてはいけません。プランニングの工夫で光を入れることはできます。日中人が集まるリビングを2階に設けることもその1つです。またドアを閉めたら真つ暗になる玄関には、ちょっとした明かり取りが役立ちます。例えば、玄関の靴箱の下に「通風開口」(5)を作ると、通風も採光も可能



③ 重層構造の建具



④ 高窓と吹き抜け



⑤ 換気と採光ができる収納下の地窓



⑥ 中庭



⑧ 屋根スラブに風を通す遮熱ブロック



⑦ 花ブロック

になります。
都市部以外の温暖地では、できる範囲で風も光も熱も利用して、特に日射熱に関しては「太陽熱給湯装置」をうまく使うことをお勧めします。住宅で消費されるエネルギーの1/3は給湯エネルギーなので、これをパッシブに代えれば省エネにつながります。最近の太陽熱給湯装置は冷媒を利用しているものもあり、屋根の

上に水が上がらないので建物への負担も少なく、効率も大変良くなっています。

また日射遮蔽のために、熱を外で遮断する「外付けの遮蔽物」が有効です。「葦簾」や「簾」で手軽に外付けブラインドと同等の効果が出ることも実証されています。その際、深く出した「軒」と窓の上部に「庇」を付けることも忘れてはなりません。

「蒸暑地」

徹底した日射遮断と蓄熱を防ぐことが肝要

蒸暑地^{じょうしょち}というのは、蒸し暑い地域のことを言い、南九州、南四国から沖縄にいたる地域です。この地域の所作の一番は「日射遮断」と「蓄熱させない」ことです。暑い地域では躯体に熱こもりする断熱よりも、日射遮蔽を徹底することが大切です。断熱がないと、溜まった熱はすぐに逃げていきます。その最も効果的なのは木造で、最近、沖縄では木造住宅が見直されているということです。

沖縄では日射遮蔽をゾーンディフェンスで行っています。外回りを

「花ブロック」(⑦)で囲み、庇を出し日射遮蔽の措置を取ります。また、屋根は屋根スラブに風を通す「遮熱ブロック」(⑧)を使い、日射が直接躯体に伝わらないように工夫しています。

「気候風土適応住宅」の認定で省エネ基準が緩和される

国交省は「省エネ法」の付帯決議に従い、地方自治体から個別に「気候風土適応住宅」の認定を受けた住宅については、「外皮基準」を適用せず、「二次エネルギー消費量基準」を緩和することとし、認定の参考となる「気候風土適応住宅の認定のガイドライン」を策定しました。

伝統的な住まいは、地域の人たちが今まで培ってきた技術と知恵の賜ですから、地方の主體的な発想をベースに認定基準の議論を進めていただきたいと思っています。ガイドラインの項目も地域で大いに議論し、どんどん足してくださいと願っています。ぜひとも地域の主體的なコミュニケーションのツールとして使っていただき、地域の住宅を見直すための材料として積極的に活用していただきたいと思っています。

	目的	機能・効果	要素
日本の住まいの要素	自然を感じる	自然の素材を味わい、継承する	瓦屋根、土壁、漆喰壁、板壁、襖、引戸、障子、畳、板の間、自然素材・地域産材
		四季の変化を感じ、楽しむ	植栽、前庭、坪庭・中庭、掃き出し窓、地窓
		光を採り入れ、制御する	高窓・天窓、深い軒、障子、日よけ(すだれ・よしず)、地窓
夏を快適に過ごす	自然の風を取り込み涼感を得る	掃き出し窓、高窓・天窓、地窓、越屋根、格子、続き間、吹抜け、襖、引戸、欄間、坪庭・中庭	
	日射を遮り室内への流入を抑える	深い軒、日よけ(すだれ・よしず)、窓庇、障子、植栽	
冬を快適に過ごす	熱移動を調節し寒さを緩和する	縁側、雨戸、障子	
	日射熱を集め、蓄えて暖かくする	掃き出し窓、土間、土壁、自然素材・地域産材	
家を守る	風雨から建物を守る	勾配屋根、瓦屋根、深い軒、板壁、漆喰壁、窓庇、雨戸、植栽、建物配置	
	湿気から建物を守る	真壁、自然素材・地域産材、畳、高窓・天窓	

出所:公益財団法人日本住宅総合センター『今に生きる日本の住まいの知恵』



藤井 繁子

『月刊HOUSING』編集長・リクルート住まい研究所主任研究員などを経てフリーの住宅生活ジャーナリストに。マンション購入・戸建建築・リフォームと自邸で実践しながら、国内外で取材・コンサルティング活動を行う。



経営とデザインによる統合が進む、インテリア産業の動向 @ミラノ・サローネ2017

世界最大規模のインテリアの祭典(ミラノ・サローネ)、今年も4月にイタリア・ミラノ市で1週間開催されました。その核となる国際家具見本市「Salone del Mobile.Milano」会場は、165カ国から34万人を超える来場者で賑わいました。隔年開催の照明見本市「Euroluce」のトレンドに加え、現地で感じたインテリア産業の動向をお伝えします。

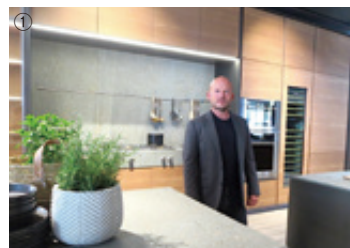
イタリアの輸出産業、世界市場開拓と生き残り戦略

イタリア家具業界(オフィス家具・照明除く)の輸出売上は2016年約1.1兆円、対前年1.2%増。メインはユーロ圏ですが、米国8.8%増、中国21.9%増という数字どおり、会場には中国人が大型バスで押し寄せていました。ただ、高級家具市場も価格競争の影響は避けられず経営効率を上げる取り組みが不可欠。近年、家具ブランドの資本提携グループ化が続いています。105年の歴史を誇るPoltrona Frau社はCassina社 Cappellini社を傘下に収め、そのPoltrona Frauグループを米国企業が買収しています。経営統合されても、各ブランドは独立し販売活動は変わらないケースが多いですが、最近は積極的にデザイナーが介入したブランド統合も見られます。

プロダクトからブランドイメージまでを監修するデザイナー

ミラノに旗艦ショールームをオープンした(Molteni&C | Dada)。家具Molteni&C社とキッチンDada社の2社ブランドを統合した新ショールームをデザインしたのが、昨年クリエイティブ・ディレクターに就任したV.V.ドゥイセン(ベルギー人)。家具のB&B Italia社でも、デザイナーのA.チッターリオが同じくデザインするArclinea社のキッチンを家具ショールームのメイン・ウィンドウに展示し相乗効果を図る狙い。デザイナーP.リッソーニも、キッチンのBoffi社が傘下に収めた家具De Padova社のショールームに、家具からキッチンまでトータルコーディネートしています。

このような動きは、前のPoltrona Frauグループのように多様な家具ブランドを揃え顧客層を広げるのではなく、1顧客に家具~キッチンと商材を広げトータル提案する戦略。その空間デザインに一貫性を持たせるべく、ディレクターの働きが重要になってきます。それを担うトップ・デザイナーの争奪戦も熾烈、その結果ブランドイメージが変わるものなので経営手腕が問われる決断です。



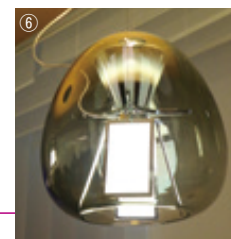
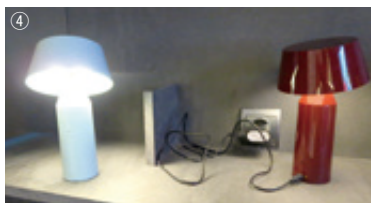
① (Molteni&C | Dada) のクリエイティブ・ディレクター V.V.ドゥイセン。自身がデザインしたキッチンの中で ② (Boffi) で驚かされたのは、昨年死去したザハ・ハニドがデザインしたキッチン! ザハ建築を感じることもできるトリビュート展示もなされていた (NY某邸宅用にデザインされたものを商品化)。(De Padova) のチェアが花を添える



さて、今年の照明見本市で多く見られたのは、USBチャージャーなどを用いたコードレス照明。卓上型や屋外照明を好きな場所に持ち運べるデザイン。個が中心のライフスタイルにマッチした照明デザインのトレンドです。



③ フランスの老舗クリスタル工房 (Saint Louis) の新作「FOLIA」。仏人デザイナー N.D.ローランスによる、白木を使ったオーガニックなデザイン。計算され尽くしたクリスタルの輝きに感動 ④ スペイン (marset) のポータブルランプ「Bicoca」、右はUSBチャージャーで充電中 ⑤ こちらは非接触給電型。照明器具の底を横にした写真、丸い給電盤に載せるだけで充電 ⑥ LEDが普及し照明の素材やデザインの自由度は飛躍的に高まった。次なる光源は有機EL。(Artemide)のハイブリッド照明「Harry H.」光源が、上部LED+下部OLED



家具のトレンド等ここで紹介できなかった内容は以下Webサイトでご覧いただけます。
《SUUMOジャーナル》《Houzz》
“ミラノ・サローネ2017”で記事検索

注目企業を訪ねる

付加価値創造に挑戦

“着物の幸せ”と“お客様の幸せ”を追求し、業界初のアフターケア事業で躍進



代表取締役

岡元 松男 氏

本社 ● 新潟県十日町市沢口丑510-1
 創業 ● 1976年
 資本金 ● 9,000万円
 従業員 ● 267名
 事業内容 ● きものアフターケア、ピフォア加工、和装品企画製造、きものアフターケア診断士講座等

株式会社きものブレイン

「着物は大切なとき以外は着ない」
 を変えるための新事業

「日本屈指の織物産地である新潟県十日町市で、「もっと気軽に着物を着てほしい」という思いから、着物の丸洗いやしみ抜きなどのアフターケアを提供してきた「きものブレイン」。生活様式の変化などで着物離れが進む右肩下がり市場の中で、同社は業績を伸ばし続け、今年3月には12億円を投資した新工場も稼働を開始している。その躍進の秘密は、どこにあるのだろうか。

「1976年に当社は呉服販売業としてスタートしましたが、好景気に沸く当時の業界模様反して、着物は汚すと大変だから大切なとき以外は着ない」という消費

1300店舗とお取り引きさせていただくまでになった」といいます。

着物業界および町を活性化し次世代につないでいきたい

「同社のアフターケアメニューは、しみ抜きや黄変抜きなど汚れへの対応はもちろん、箔修正や柄修正、寸法直しなど幅広い。あらかじめ水や汚れを弾いて着物を守るための撥水加工「しあわせガード」なども人気で、5年間無料アフターケアサービスも、同社が始めた業界初の試みだ。これらの幅広い加工技術を活用し、新たに着物仕立て事業にも参入している。

「着物を仕上げるまでには、反物に蒸気をあてながら生地の中を整える。湯のし、や、家紋入れ、そして仕立てなど様々な工程があります。通常は呉服店が各外注先に別々に手配するのが一般的です。当社では、この一連の作業を一貫加工体制で請け負う業界初のワンストップサービスを展開し、約60日かかる平均納期を25日までに短縮。加工コストも30%カットを実現し、お客様へ早く、そして安く着物をお届けすることを可能にしました」

「人材育成にも積極的に取り組んでおり、指導体制も充実させている同社。長年の経験から培ったノウハウを効率よく習得

ここが注目ポイント

ピフォア加工～縫製までを一貫して行える体制を構築

技術者の育成を強化し若い世代の雇用を創出

“きもの文化村構想”で業界および地域活性を目指す



本社工場内、アフターケア、ピフォア加工、縫製などを一貫体制で行う



アフターケアの一例「工芸修正」。しみを漂白し顔料を用いて着物に柄を描き足す「顔料修正」、取れた金箔を修復する「箔・金加工」などがある



経済産業省のサポイン事業*の認定を受け、年間100トンの繭の生産を目指し、年間10トンの試験養蚕を行う *サポイン(支援)インダストリー



家庭で水洗いができ、着付けも簡単な“次世代きもの”「和音」も展開

者の声から、着物離れが進んでいると感じ危機感を抱きました。その理由は、着物のお手入れが難しいこと。汚れた着物をケアする場がなく、高級な着物ほど着ないでしまっておく傾向が強まっていました。着物を販売するだけでなく、お客様の不便や不満を解消する。お客様目線のビジネスを提供したい。そう考え、83年に業界で初めて、着物のアフターケアを事業化しました

「着物のアフターケアは口コミで広がり、消費者からは大いに喜ばれた。しかし、道のりは険しかった。販売窓口である呉服店にその重要性を説いても、色よい反応は返ってこなかったという。ところが、93年に転機が訪れる。バブルの崩壊だ。その影響は全国の呉服店にも及び、業界売り上げは50%ダウンという大打撃を受けることになる。

「当初は、着物は所有するだけで満足。高額品でも着物は買い替えていけばいい。汚れた着物を持ち込まれても加工できない」と一蹴されました。ところが、着物を次々と買い替える時代ではなく、そんな危機感から呉服店も、アフターケアの必要性に気づいてくれたようすです。以降、呉服店からの受注が急増し、当社は経営危機を脱することができました。現在では、全国に約4000店舗ある呉服店のうち、

「できる」きものアフターケア診断士講座なども実施し、通常は5年程度かかる技術習得を2年でマスターできる。

「着物に関わるあらゆる加工に携われるため、近年では美術系大学出身者の就職先としても注目されています。着物業界は高年齢化が進み50代が中心ですが、当社の平均年齢は37歳と非常に若い。業界の若返りと若者の雇用創出にも貢献しています」

「アフターケアは今や着物業界には欠かせない産業に成長し、京都を中心に競合他社は70〜80社に増加している。とはいえ、着物離れには歯止めがかからない状況だ。「着物業界および十日町を活性化し、次世代につないでいきたい」。そんな思いから同社では、新たな市場への挑戦も始めている。

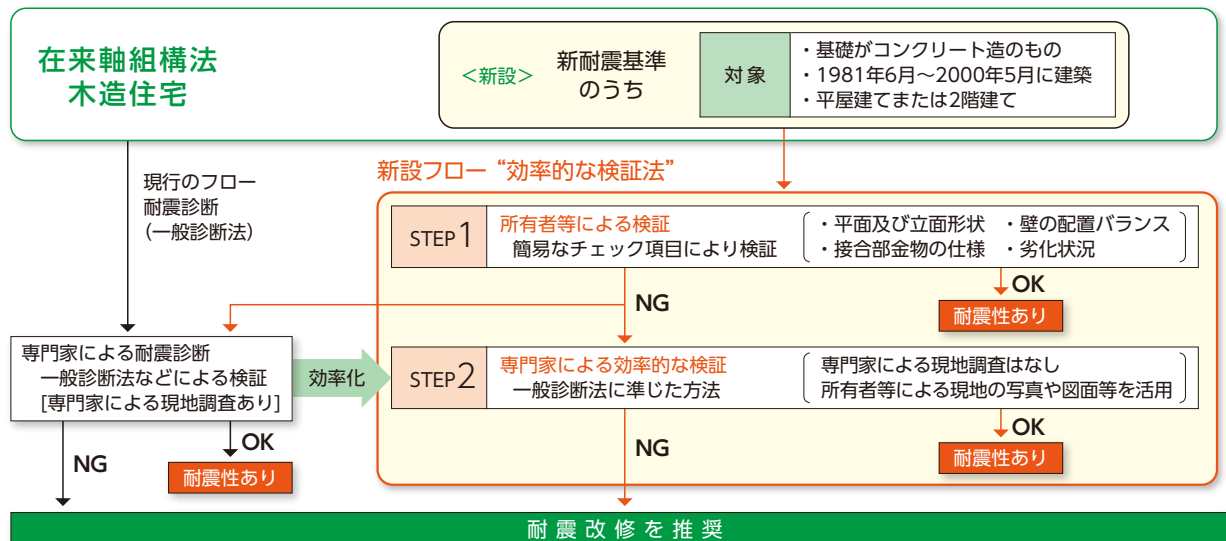
「産業観光工場化や大学とのインターンシップ提携、そして手織、草木染職人の工房などを備えた「きもの文化村構想」にも着手し、十日町の人口増加も目指しています。その第一期工事として本社工場が完成し、旧工場を高品質の蚕を育てる世界初の無菌人工給餌周年養蚕拠点に転換。繭のたんぱく質を使ったサプリメント事業なども本格化しています。きもの文化を継承するためには私たちが何ができるのか。そのことを常に考え、若い世代に引き継いでいきたいと思っています」

2017年5月、効率的に木造住宅の耐震性能を検証する「新耐震木造住宅検証法」を公表 — 国土交通省

熊本地震の建築物被害を踏まえ国土交通省は、接合部等の規定が明確化された2000年以前に建築された在来軸組構法の木造住宅を中心に、耐震性を検証する方法として「新耐震基準の木造住宅の耐震性能検証法(新耐震木

造住宅検証法)」をとりまとめた。専門家でなくとも検証できる「所有者等による検証」と、現地調査がなくてもできる「専門家による効率的な検証」を新設した。詳細は(一財)日本建築防災協会ホームページに公開されている。

■ 新耐震基準の木造住宅の耐震性能検証法のフロー図



※ 他の構法の建築物については、構造方法に応じて、耐震診断方法が定められている

消費者もFPも「住宅は買い時」の回答が多数 「平成29年度における住宅市場動向」 — 住宅金融支援機構

住宅金融支援機構は、住宅事業者、一般消費者、ファイナンシャルプランナーに対し、2017年2月～3月に今後の住宅市場に関してアンケート調査を実施。「平成29年度における住宅市場動向について」のレポートをまとめた。

調査結果の主なポイントは、2017年度の「受注・販売等の見込み」については、「前年同期と比べて増加」が53%を占めた(住宅事業者)。また「住宅の買い時感」は、一般消費者は「買い時」52.8%、「どちらともいえない」40.3%であったが、ファイナンシャルプランナーは前年同期と比べ「買い時」67.2%、「どちらともいえない」20.7%となった。住宅事業者の重点的取組事項と一般消費者が重視するポイントは、ともに省エネ性や高耐久性の「建物の性能」が最も多かった。

■ 住宅事業者の重点的取組事項と一般消費者が重視するポイント

住宅事業者への調査結果		一般消費者への調査結果	
1位	建物の性能	1位	建物の性能
2位	土地の仕入れ	2位	住宅の立地
3位	住宅プランの提案力	3位	デザイン
4位	デザイン	4位	住宅の価額や手数料
5位	設備の性能	5位	設備の性能

「建物の性能」に関して、
住宅事業者は「省エネルギー性」を最も重視、
一方、一般消費者は「高耐久性」を最も重視

住宅事業者への調査結果		一般消費者への調査結果	
1位	省エネルギー性	1位	高耐久性
2位	耐震性	2位	耐震性
3位	高耐久性	3位	省エネルギー性
4位	通風・換気性	4位	遮音性
5位	劣化対策	5位	通風・換気性

編集室より

- 弊社ホームページに特集ページのみを掲載中です。
<http://sfc.jp/mokuzai/kenzaimonthly/>
- 広告掲載・誌面に対するご意見、ご感想は
建材マンスリー編集室専用アドレスまでお寄せください。
kenzai-monthly@sfc.co.jp

住友林業株式会社 木材建材事業本部 事業企画部

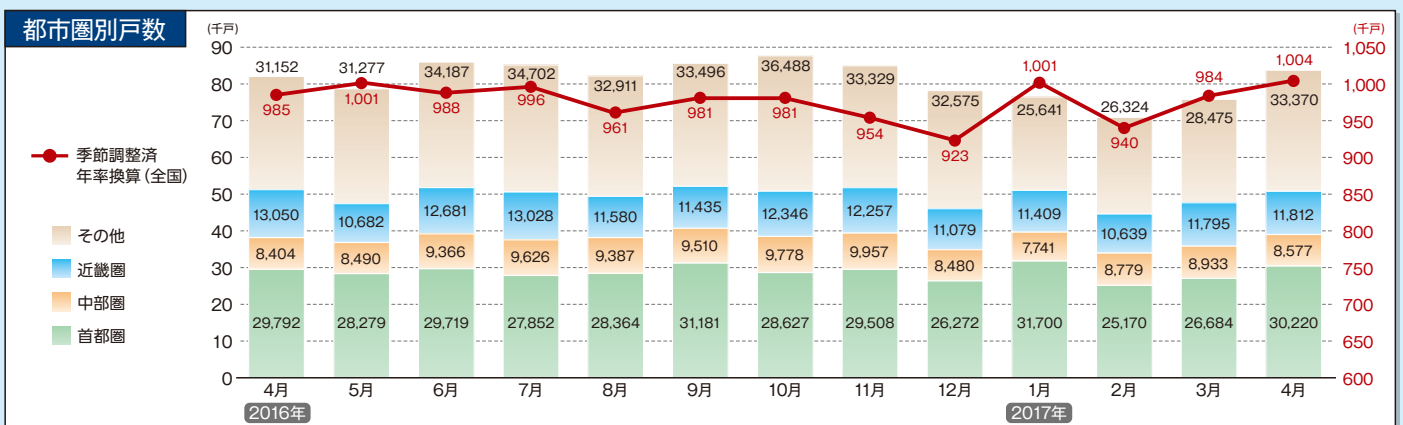
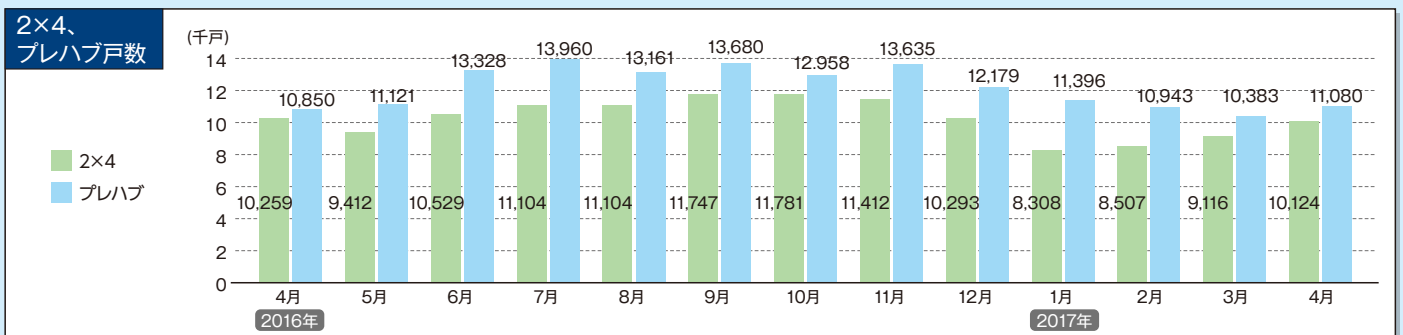
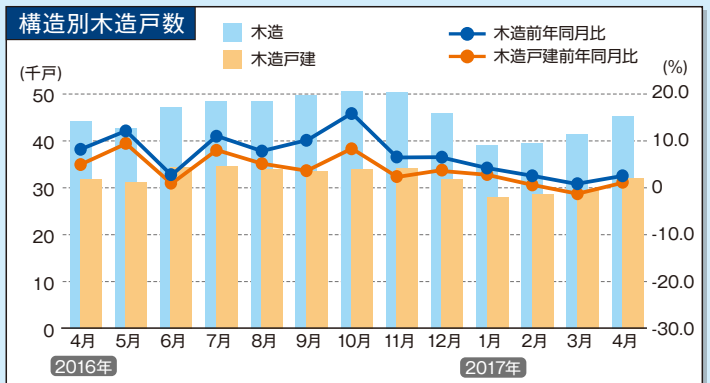
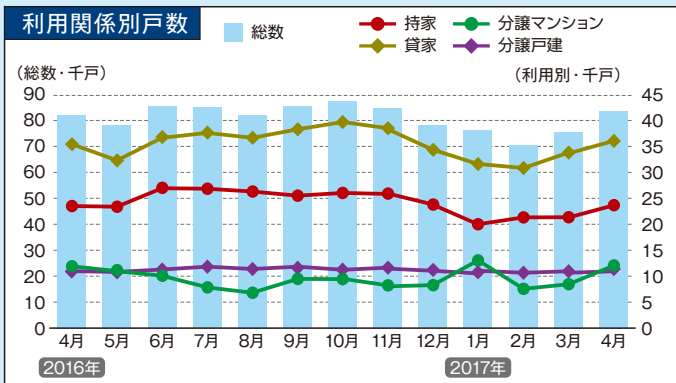
私の実家は、約40年前に建てた2階建ての1軒家でした。1階には東西に二間続きの和室と障子を挟んで南側に縁側があり、ほぼ前面が掃き出し窓でした。そのため、冬の晴れた日の縁側は暖かく日中は暖房いらず。夏の夜は窓や建具を開放すれば熱気が出ていき、今ほど暑さが厳しくなかったとはいえ、1階では扇風機だけで快適に眠れました。少し高台で周囲を遮る建物がない立地にも恵まれ、今思えばパッシブデザインの良さを味わいつつ過ごした子ども時代でした。(T)

表紙：住友林業(株)住宅事業本部 多摩支店 西東京・小平住宅展示場

* 家具などのインテリア品は実際の展示と異なる場合があります

2017年4月の新設住宅着工戸数 単位：戸 ▲は減

		4月				3月	2月	1月	
		対前年同月比		対前々年同月比					
新設住宅計		83,979	1,581	1.9%	8,362	11.1%	75,887	70,912	76,491
建築主別	公共	1,627	▲ 895	▲ 35.5%	165	11.3%	1,255	777	659
	民間	82,352	2,476	3.1%	8,197	11.1%	74,632	70,135	75,832
利用関係別	持家	23,751	184	0.8%	457	2.0%	21,468	21,322	20,228
	貸家	36,194	690	1.9%	5,591	18.3%	33,937	30,842	31,684
	給与住宅	326	28	9.4%	▲ 274	▲ 45.7%	755	350	518
	分譲住宅	23,708	679	2.9%	2,588	12.3%	19,727	18,398	24,061
	うちマンション うち戸建	12,097 11,504	161 571	1.3% 5.2%	1,026 1,611	9.3% 16.3%	8,549 11,041	7,562 10,696	13,098 10,863
資金別	民間資金	75,187	2,642	3.6%	8,060	12.0%	67,957	62,873	69,253
	公的資金	8,792	▲ 1,061	▲ 10.8%	302	3.6%	7,930	8,039	7,238
	公営住宅	1,220	▲ 915	▲ 42.9%	85	7.5%	1,212	663	586
	住宅金融機構融資住宅	3,515	▲ 472	▲ 11.8%	▲ 76	▲ 2.1%	3,643	3,553	3,517
	都市再生機構建設住宅	352	352	—	109	44.9%	21	26	43
	その他住宅	3,705	▲ 26	▲ 0.7%	184	5.2%	3,054	3,797	3,092
構造別	木造	45,205	1,114	2.5%	4,409	10.8%	41,536	39,587	39,079
	非木造	38,774	467	1.2%	3,953	11.4%	34,351	31,325	37,412
	鉄骨鉄筋コンクリート造	508	290	133.0%	162	46.8%	382	512	364
	鉄筋コンクリート造	25,202	▲ 134	▲ 0.5%	3,696	17.2%	21,375	17,769	23,404
	鉄骨造	12,923	332	2.6%	108	0.8%	12,478	12,937	13,587
	コンクリートブロック造 その他	40 101	▲ 57 36	▲ 58.8% 55.4%	▲ 49 36	▲ 55.1% 55.4%	58 58	52 55	28 29



(出所：国土交通省ホームページ http://www.mlit.go.jp/statistics/details/jutaku_list.html)

JSP

建材トップランナー制度対象製品

押出法ポリスチレンフォーム断熱材
平成34年度目標値0.03232W/(m・K)

限界を超越した断熱性能

エクスフォーム^{EXFO}

押出法ポリスチレンフォーム
JIS A 9521 (XPS3aD)・
JIS A 9511 (A-XPS-B-3a)

熱伝導率
0.022
W/m・K (23℃)

- ▶ 吸水性が低く安定した性能
- ▶ ノンフロン・ノンホルムアルデヒド
- ▶ 4VOC基準に適合
- ▶ 曲げ強度(靱性)に高い性能

「高断熱性能」と「効率化」を望むなら、この組み合わせ!!

ムダなくスッキリ効率的な施工を実現!!

対応製品 **エクスフォーム & エクスフォーム^{EXFO}**

大引間割付断熱工法

CADデータ対応!!
「CEDXM」、「DXF」形式



▶ 必要なだけの「断熱材」を
プレカットしてお届け

株式会社 JSP 第一事業本部 建築土木資材事業部

ホームページ <http://www.co-jsp.co.jp>

本社 〒100-0005 東京都千代田区丸の内3-4-2(新日石ビル) TEL 03-6212-6363

東日本建材統括部

札幌営業所 TEL 011-231-2681(代)

仙台営業所 TEL 022-262-3271(代)

住宅資材グループ TEL 03-6212-6363

西日本建材統括部

名古屋営業所 TEL 052-962-3225(代)

大阪営業所 TEL 06-6264-7903(代)

広島出張所 TEL 082-568-0566(代)

福岡営業所 TEL 092-411-6854(代)

建材マンスリー
No.620
JUNE
2017



昭和39年8月創刊 第53巻 平成29年6月1日発行(毎月1日発行)
発行人/福田 晃久 発行所/建材マンスリー編集室 〒100-8270 東京都千代田区大手町1-3-2(経団連会館)
住友林業株式会社 木材建材事業本部 事業企画部

通巻620号

東京都千代田区大手町1-3-2(経団連会館)

TEL 03-3214-3280

FAX 03-3214-3282